

# Eureka VI

六年制通信 No. 24 平成30年11月24日(土)号

## 考えるということ

私は不易流行という言葉が好きで、とりわけ不易、すなわち変わらないものあるいは変えてはいけないものを大切にしないといけないと思っています。そういえば、吉本新喜劇の座長さんが「自分たちに求められているのは老舗の味の定食なんです。いろんな外国の方の舌に合うように味を変えるようなことはしません。ただ、箸では食べにくいでしょうからスプーンを出したりはします」と、正確ではないかもしれませんが概ねこんなことを言っていました。舞台に英語の字幕を流すことにしたとかいう話の中で出た言葉だったかな、詳しくは忘れましたが、お箸の比喻は秀逸だと思ったので記憶に残っています。私はひそかに拍手を贈っておきました。

私たちは(残念ながら日本人の悪い癖だと思うのですが)不易より流行を追うことが好きですよ。しかも極端に走ってしまうように思います。教育界にも似たようなことがあって、最近「知識から思考力へ」という言い方がスローガンみたいに掲げられていますが、こういう標語にも日本人は弱いですね。これを「知識を問うのは古い」とか「学校では知識を詰め込むより思考力を養うべきだ」とか、ついには「知識はいらない」という論調まで聞かれるようになります。危険ですね。

だいたい、このスローガンが間違っています。正確な知識がなくて思考力を養うことはできません。ですから「知識から思考力へ」というのは「知識→思考力」みたいに何か転換をするのではなく、本当は「知識+思考力」とすべきです。むしろ、より一層正確な知識を求められると解釈する方がいいと思います。

では、思考する力とは一体どういう力のことなのでしょう。君たちもよく「考えなさい」と言われると思いますが、それはどういうことなのでしょう。

何かを理解するために考える。何かを創造するために考える。それらはどういうことなのか。私はよく例に出すのですが、水族館でタコを見てきた子供にその特徴を聞くとします。いろいろな答えがありそうですが、もしその子がその他の生物を知らずタコしか見たことがなかったとしたら何も答えられないのではないかと思います。特徴とは他との比較で浮かび上がってくるものなのですから。タコ以外の膨大な数の生物について知ったうえで、初めてタコの特徴を知ることができ、また似ているようにでもイカとは違うことにも気がつくようになります。タコにもいろいろな種類があることもわかるようになります。つまり、比較できること。そして分類ができること。これらが考える基礎となると思うのです。水族館でも、例えば深海に棲むという特徴から深海魚のコーナーができています。あれは分類されているわけです。それには正

確な知識がたくさん必要です。理解という言葉は、もともと細かく分けるという意味です。比較・分類ができて理解が進むのです。

ノーベル賞を獲るような人は何か新しいことを創造しているわけですが、これも全くの無から生み出されるものではありません。それは既知の知識を新しく「関連づけ」することで生まれることが多いと何かで読んだことがあります。一見何の関係もないような事柄を関連づけることで仮説が生まれなのでしょうね。これもまた、正確な知識をたくさん持って初めてできることです。繰り返しになりますが「比較・分類・関連づけ」が考える基本で、その材料となるのが多くの正確な知識だというわけです。

正確な知識を得るには不安に打ち勝つ必要があります。前にフロー体験の話をしたとき、能力の低い人が難しい課題に取り組むと不安になるという話をしました。例えば英語は中学校で初めて習うのですから君たちが中学に入ったとき、その能力は低い状態です。英語については何も知りません。しかし、そこから何千という単語を覚え、英文を読み、聴き、つまり君たちにとっては難しい課題に取り組むわけです。不安になりますよね。だけどそれが、君たちの思考力を養う基礎知識となるのです。不安に負けないで身につけて下さい。私は、知識とは要するに語彙だと言っていいと思っています。ある光景を、見たまま人に伝えようとするとき、その映像を映像として送ることはできません。描写するには多くの語彙が必要です。自分の言いたいことを専門用語を用いないでやさしく表現するにも豊富な語彙が必要です。ある現象をわかりやすい比喻を用いて説明できるかどうかは語彙の豊かさで決まるでしょうし、そして「比較・分類・関連づけ」ができないと困るでしょうね。

これから君たちが何かを「考える」とき、参考になればと思って書きました。

#### 今週のおすすめ

・中原中也 『中原中也詩集』(大岡昇平編) (岩波文庫)

有名な所では、「汚れちまった悲しみに 今日も小雪の降りかかる」なんか、君たちも知っているでしょうね。あるいは、「帰郷」のラスト「あゝ おまへはなにをして来たのだと… 吹き来る風が私に云う」もよく知られた詩ですね。中也は若くして夭折していますが、残された作品は長い間愛されてきています。私も好きです。だいたい詩や短歌などは作り手の年齢や人間性とは無関係に存在します。小説だと若い人が書いたものは老人には物足りないということがあられるらしいけどね。

石川啄木の「たはむれに母を背負いてそのあまり軽きに泣きて三步あゆまず」など、これを読むと実に親孝行な感じがしますが、実際にあの親不孝な啄木がそんなことをするはずがありません。啄木の空想です。しかし、詩歌は現実とは別次元に存在し、私たちを楽しませてくれます。

ちなみに中也で一番好きなのは、中学か高校か忘れましたが国語の教科書に載っていた「吹く風を心の友と」です。私はその部分を切り取って、まだ持っています。うちの図書館にあります (p. 338) から読んでみて下さい。

BGM はペドロ&カプリシャスの 別れの朝 でした…。